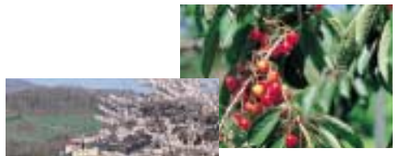
海から大地から実り豊かな町［余市］

本校が位置する余市町は札幌からJRで1時間、千歳から2時間に位置します。積丹半島を望む日本海とゆるやかな丘陵に囲まれた町は、豊かな自然にあふれ、海洋性の気候と風土に恵まれ、漁業とリンゴ、サクランボ、ブドウの栽培が盛んです。

生徒たちは初めこの自然にとまどい、やがて夏は釣りやサイクリング、冬はスキーにスノーボードなど、ゆっくりと時間の過ごし方を探っていきます。



豊かな自然の中、3年間で得るもの

卒業は、あなた自身の誇りとなるでしょう。

多くの人との「対話」は、あなたのみずみずしい感受性を刺激することでしょう。

余市町の豊かな自然の中、大地に足をつっぱって生きてきた「経験」は、これからのあなたを支えてくれる財産となります。

私たちは、あなたたちのきらめきに、余市町の澄んだわき水を重ね見ています。大地にしっかりしみ込んで、川をゆっくりと下り、大きな海や空へと飛び出していくのを楽しみにしています。

あなたたちがつかむであろう「自分」は、私たちの財産でもあると本校は考えています。

北星学園余市高等学校　校長　簑輪 菊雄　（問い合わせ窓口）　平野 純生

〒046-0003　北海道余市郡余市町黒川町96番地
TEL 0135-22-6211（代表）・0135-23-2165（教員室）　FAX 0135-22-6097
ホームページ　http://www.hokusei-y-h.ed.jp　E-MAIL　hokuseiy@hokusei-y-h.ed.jp
i-mode　http://www.hokusei-y-h.ed.jp/i/top.htm

学校法人 北星学園

北星学園大学大学院
北星学園大学
北星学園大学短期大学部
〒004-8631
札幌市厚別区大谷地西2丁目3番1号
TEL 011-891-2731（代表）

北星学園大学付属高等学校
〒004-0007
札幌市厚別区厚別町下野幌38番地
TEL 011-897-2881（代表）

北星学園女子高等学校
北星学園女子中学校
〒064-8523
札幌市中央区南4条西17丁目2番2号
TEL 011-561-7153（代表）

『新しい自分』を発見

あなたの入学を歓迎します。

学校長
簑輪　菊雄

現代の教育の矛盾の中で悩んでいる全国の若者や保護者のみなさん、北星余市高校では高校中退者や小・中学校での不登校に悩んでいた生徒たち、また今の教育について行けない、もう少しゆっくりと心が豊かになるような教育を受けたいと思っていた生徒たちが集まって、仲間たちと励まし合いながら高校生活を送っています。

北星余市高校では一人ひとりの違いを認め個性を尊重し、それぞれが自立していけるように励まし支援しています。学校という集団の中で、他から学び、自分を知り、仲間との協力・共同の中でそれぞれが育っていくことを目指しています。

生徒たちは、海や山に囲まれ、きれいな水や雪などの大自然の豊かさの中で、また民間の寮や下宿の人々の豊かな人情味の中で、自分を取り戻し、マイペースで高校生活を送ることができます。

教職員や在校生はもとより、ＰＴＡ父母、寮・下宿の管理人さんたちみんなであなたの入学を歓迎します。

index

●北星余市の教育 …… P4～
●北星余市の授業 …… P8～
●北星余市の行事 …… P10～
●北星余市の活動 …… P12～
●北星余市の進路指導 …… P14～
●北星余市を支える人々 …… P16～
●北星余市で考えよう …… P18～

北星余市の
教育

「新しい自分」を発見

子供の不登校、中退は親にとってまさに地獄の苦しみ、悲しみ。まして、周囲の人々の興味本位の対応はつらい。親切ゆえのアドバイスでさえ刃(やいば)に感じてしまう。**同じ困難を経てきたこの親達はお互いを認め合い、また、それぞれの子供を認め合う。**そして、親は楽になれる。　（父母の声）

point 1　高校中退生・不登校生が全国から集まってきます。

本校は1965年、余市町の誘致によって建てられたキリスト教主義(プロテスタント)の学校です。創立当時、公立高校受験に失敗した生徒たちが集まる高校として運命づけられ、それだけで生徒たちは肩身の狭い思いをしたこともありました。そんな中で、本校の教師たちは、レールからはじき出されてきた子どもたちに寄り添いつつ、その子どもたちから元気を引き出し、自立させるために情熱を傾けてきました。

それは、一人ひとりの生徒を大切にし、生徒自らの手で生徒自身の問題を解決していけるよう手を差し伸べる教育でした。

1987年、本校に危機が訪れます。未曾有の生徒減の嵐の中、学園理事会が「廃校」の決断をしなければならないところに追い込まれたのです。「差別を受け、苦しんでいる子どもたちを、一体誰が面倒みるのか、北星余市にしかできないことがあるはず」と、余市の教師たちはふんばりました。これまで、一人ひとりの子どもたちの心を理解しようと苦しみ学びながら全身で愛情を注ぎ営んできた人間教育を、ひたむきに守ろうとするものでした。何日も徹夜の議論の末に、日本で初めて「全国から高校中退生・不登校生も受け入れよう！」と決意したのです。

point 2　やめた学年から入りなおせます。

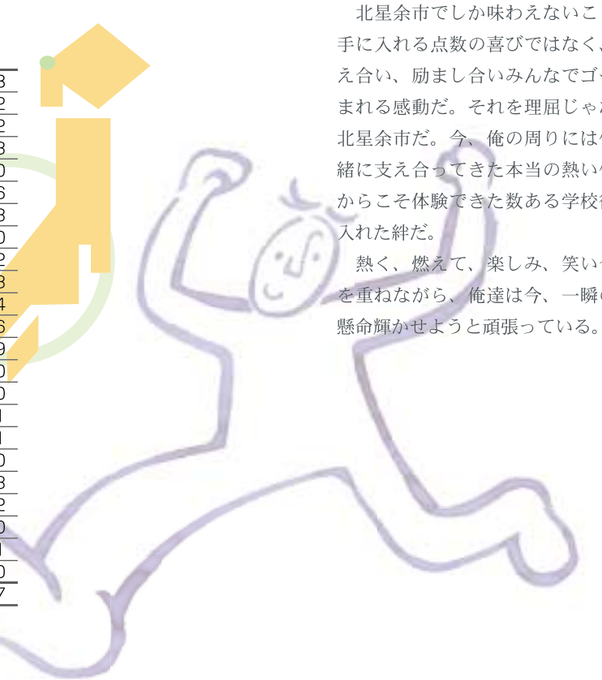
1988年、「やめた学年から入りなおせる」学校としてスタートしました。現在、本校の約7割は、高校中退や不登校の経験を持っている生徒です。この生徒たちは、一度、学校に失望し、それでも高校に通いたいという意志と意欲を持ち、本校の門をたたいてきます。

入学にあたって最も大切なことは、「本校に入学してからは休まないで、学校に通う」決意を本気でもっていることです。お互い苦しんだ痛みを共感しあい、認め合い元気になっていく生徒が8割以上です。小学校から不登校だった生徒が、3年間皆勤で通い続ける例も少なくありません。

こうした制度は現在、全国的な共感を集め、生徒の7割は、道外出身者に広がっています。

■都道府県別生徒数（2005.5.1）

北海道	115	滋　賀	8
青　森	15	京　都	12
岩　手	3	奈　良	2
宮　城	11	和歌山	3
秋　田	4	大　阪	20
山　形	7	兵　庫	16
福　島	7	岡　山	3
茨　城	11	広　島	10
栃　木	9	鳥　取	2
群　馬	3	島　根	3
埼　玉	16	山　口	4
千　葉	19	愛　媛	6
東　京	37	香　川	9
神奈川	24	高　知	0
静　岡	11	徳　島	0
山　梨	2	福　岡	11
長　野	7	宮　崎	1
愛　知	21	熊　本	0
岐　阜	6	大　分	3
新　潟	5	長　崎	2
石　川	2	佐　賀	0
富　山	4	鹿児島	1
福　井	1	沖　縄	0
三　重	1	合　計	457



「一瞬の輝きのために」

39期生徒会長
松本　遼

「行儀よく、静かに、勉強、成績、ダルイ、圧力・・・」これが俺の持っていた「学校」のイメージだった。ハッキリ言って、みんながなぜ義務教育を終えてからもなお学校に行き続けるのかまったく分からなかった。

でも今は違う。この北星余市高校に出合い、ここに通うようになってからは、「学校」に対する俺のイメージが変わりはじめた。

俺は３歳年長で北星余市の門を叩いた。

きっかけは１本の映画だった。「高校」という場所で、主人公達が仲間と一緒になってシンクロをやるためにいろんな苦しみをくぐる物語だった。俺はその映画に感動した。そして「高校」というところへ行きたくなったのだ。勉強机にかじりつくのではなく、何か違うもの、「学校」でしか味わえないものがほしかった。それを求めて俺はこの北星余市に来た。

北星では行事が他の学校とは比べものにならないほど多い。先生達は上からではなく。俺達と同じ所まで来て対等に話をしてくれる。俺達が分かるまで時間を惜しまず真直ぐに話し合ってくれる。そしてココにはいろんな個性を持った仲間もいる。たった１日２日の行事のための準備を、何日もかけて話し合う。仲間と一緒に喧嘩しながら、支え合いながら、時間を惜しまずにとりくむ。みんなで一つになり、頑張ってやり遂げる感動をコノ学校は俺に教えてくれた。一人では到底乗り越えられない壁も仲間と一緒なら乗り越えていけると思った。

北星余市でしか味わえないこと、それは勉強やテストで手に入れる点数の喜びではなく、一つの目標に向かって支え合い、励まし合いみんなでゴールを目指したところに生まれる感動だ。それを理屈じゃなく体で感じていけるのが北星余市だ。今、俺の周りには仲間がいる。辛いときも一緒に支え合ってきた本当の熱い仲間達だ。北星余市にいるからこそ体験できた数ある学校行事や下宿生活の中で手に入れた絆だ。

熱く、燃えて、楽しみ、笑い合って、たくさんの思い出を重ねながら、俺達は今、一瞬の輝き（高校生活）を一生懸命輝かせようと頑張っている。

「教育方針」

1. キリスト教の精神にもとづき、教育が行われます。それはみんなが力を合わせて愛し合い、助け合って生きていくことを共に考えていこうというものです。

2. 明るく、健康な身体を鍛え、自然や社会を正しく科学的に判断できる力を養うことを、教科指導を通して追求します。

3. 生徒を集団の中で育て、個人や集団の自主性、自発性、自治能力を育て、高めていきます。

4. 教育活動を支える優れた教師集団作りを大切にしています。

5. 父母、教師、生徒が一体となった教育を進めています。

point 3 違っていていい。生徒も教師も一人ひとりを尊重する学校。

全国から、時代に揺さぶられながら、いろんな悩みを抱えてやってくる生徒たち。その年齢もさまざま。経験もさまざま。違いを認めあいながら、かけがえのない一人として尊重される。本校は、それを阻む暴力、いじめ、薬物を、絶対に許さないという厳しさを貫いています。

安心できる自分の居場所がある、安全に生活できる自由な雰囲気の中で、自分を素直にだしきれるように、教師集団は、精一杯支援しています。それは、教師もまた、個性を尊重され、心を開いた実践ができている証です。素のままで向き合う教師は、一緒に悩み、考え、本気で怒り、泣き、笑う素朴な人間・教師たちです。

先生もいろいろ。しかし、みんな熱心に(子どもに言わせると「しつこい」くらい)対応してくれる。先生も自分の長所、短所全てをさらけ出して対応してくれる。 （父母の声）

職員室は癒しの場

10分の休み時間といえども、
生徒は職員室にドッと押し寄せ、語り合っています。
職員室は生徒たちの癒しの場になっています。

薬物問題の後の学校の状態に注目して欲しい。先生も頑張った。生徒達も自ら、薬物、タバコ禁止運動を繰り広げた。不登校、中退生だった生徒生たちが、日常の生活改善運動を通して、学校を守ろう、自分たち自身を守ろう、と立ちあがったのだ。今ではトイレのタバコもなくなっている。親達も事件時はドキッとしたものの学校に対しての信頼は揺れ動くことはなく、今はこの学校の試練の時を子どもが経験してくれたことはよかったのだ、と確信している。薬物の恐ろしさを理解してくれただろうし、人間はその気になればやり直しができるんだ、と自信を持ってくれたと思うから。 （父母の声）

生徒会役員が話しあう

ボランティアしながら町のお祭り（北海ソーラン祭）を楽しむ

point 4 生徒会が燃えれば、学校が変わる。

生徒の自主性と自治を大事に育む姿勢は、本校の誇る伝統です。「生徒会が燃えれば、学校が変わる。」生徒会は、学校行事のほとんどを担っています。執行部自ら楽しむ心で全校生を楽しませようとリーダーシップを発揮し、全校生一つになって熱く燃えます。一方、行事の傍ら、生徒自らの生活問題は、生徒会執行部がリーダー性を発揮して、話合い、全校生みんなの運動にして解決を図る力を蓄えています。

2001年9月、悪夢のような薬物事件がありました。これまでの生徒と教師で積み上げた「信頼」を基に、担任団一人ひとりが、悔しさと悲しみの涙で教師生命をかけて、正直に名乗り出るよう訴えました。「信頼されてきたのに、裏切るわけにいかない」と生徒たちは、心を開いて応えてきました。「信頼関係が生きていた」ことを喜びつつも、関わった生徒の多さに頭が真っ白になりました。薬物汚染が若者の中に、想像以上に広がっていることを知らされたのです。

正直に名乗り出た者たちに、厳しい反省を迫りながら「生き方を考え、自分を大事に生きる」指導に踏み切りました。

生徒会執行部もまた、「薬物を他人ごととしてはいけない。これぐらいなら大丈夫、見つからなければ良いなどという甘えをなくさなければならない。ダメなことは絶対にダメなのだ。」とこれまでの甘えや、知っていても注意できなかったり、見逃してきた自分たちの人間関係の希薄さに刃を突きつけたのです。クラス、学年、全校へと話合いが続きました。

そして、「今できること」から行動に移そうと、タバコを含む生活改善に取組み、クリーンな校舎に変身させました。

以降、生徒会を中心にした日常的な生活改善運動として、しっかりと受け継がれてきています。

生徒総会の議長団と執行部

北星余市の
授業

「わかって、楽しい」授業づくり

point 1 魅力ある授業を通して、学力を高めます

どんな生徒でも授業の内容が知的な魅力に満ちて、理解することができれば、「楽しい！」と思って、授業に集中するでしょう。

本校の授業は、生徒にとって、「わかって、楽しい」授業をめざしています。授業の中では、ものごとの中に潜んでいる真実を発見し、自分の頭で考える力を養っていけるよう心がけています。

教師は、日々教材研究の努力と良い授業にしようとする生徒たちの協力の中で授業を追求しています。

（授業カリキュラムの詳細は、9ページをご覧ください。）

娘は折にふれ、北星での「授業」をなつかしげに話してくれる。「文学の授業はね、人間を問うというか、深い心の奥まで読みとろうとするの。だからすごく考えた。一つの教材を、夏の暑いときから、気がつくと雪の降る季節までかけてやるんだよ。むずかしいんだけど、何を伝えようとしているのかだんだん分かってくるの」「なかには、たしかに授業がヘタな先生もいて、みんなが集中しないことも多かった。けど生徒になんとか分からせたいっていう熱意が伝わってくる。決して見捨てないよって伝わってくるの」「日本史なんか、1年かけて昭和史だよ。戦争の悲惨さは、もうイヤになるほど先生に聞いた。だから平和憲法がどれだけ大切かってことも。七三一部隊のことまでくわしい高校生なんていると思う？」過ぎ去ったら、なんでこんなにいろいろなことが見えてくるのだろう。生徒以上に先生のほうが個性的で自由を求める人たちだったんだ。だからこそ“生徒の個性や主張”を大事に大事にしてくれたんだ。（父母の声）

point 2 興味がいつか才能になる。イキイキと体験する総合講座

積極的に生徒たちが自ら学んでみたい、体を動かし、手を動かして造ってみたい、そして、そこから喜びや感動を味わってみたいと思うような授業を、本校ではオリジナルに創りだし、実践しています。

講師は、この地域の芸術・芸能の専門家をはじめ、その道では第一線の講師の方々を学外から招いて、授業を展開しています。

point 3 海外研修

国際化教育の一環として、冬休みの長期休暇を利用して、本校では生徒の短期留学（ホームステイ）を行っています。1999年度のイギリスを皮切りに、アメリカ（'00）、オーストラリア（'01）、ニュージーランド（'02）、カナダ（'03）と着実に実績を重ねています。

卒業後、海外の教育機関へ進学を希望する生徒や、仕事の場を海外に求める卒業生も年々増えています。

カナダにて

■ 授業カリキュラム

学　年	1年生	2年生	3年生
国　語	国語表現Ⅰ(2) 国語総合（2）	国語総合（3）	現代文（3）
地理歴史		世界史（3）	日本史（3）
公　民	現代社会（3）		政治経済(2)
数　学	数学基礎（2）	数学Ⅰ（3）	数学Ⅱ（3）
理　科	理科基礎（3）	理科総合(2)	物理Ⅰ（3）
保　健	体育（3）	体育（3）	体育（4）
体　育	保健（1）	保健（1）	保健（1）
芸　術	音楽Ⅰ（2）		
外国語	英語Ⅰ（4）	オーラルコミュニケーションⅠ(2)	オーラルコミュニケーションⅡ(2)
		英語Ⅱ（3）	英語Ⅱ（3）
家　庭	家庭基礎（2）		
情　報		情報（2）	
宗　教	聖書（1）	聖書（1）	聖書（1）
	礼拝（1）	礼拝（1）	礼拝（1）
総合的な学習の時間		選択総合（2）	総合講座（2）
単位数	26	26	28

1. 学期は3学期制。1学期は4月～7月、2学期は8月～12月、3学期は1月～3月。
2. 上記の表の数字は1週当たりの授業時間数（単位数）。
3. 1年の家庭は男女共に必修。
4. 1年は柔道ありません。

■ 総合講座名

金管アンサンブル
陶芸
木彫
余市の自然と歴史と文化
社会福祉
八丈太鼓
英会話
ビデオ制作と編集
水泳
ゴルフ
クラシック・ギター
琴
和凧
車の学習
時・季節を知るクッキング
ヨット
写真
囲碁・将棋
バード・ウォッチング
社交ダンス
合気道
中国文化
ピアノ
絵手紙

北星余市の
行事

仲間、友情、団結って、カッコウいい。

point 1 一つになる感動！自分も仲間も誇りに思えます。

本校の学校行事は、とてもエネルギーに満ちあふれています。

一つの目標に向かって、様々な葛藤の末に一つになる感動があります。

行事が自信を育み、仲間の大切さを気づかせ、団結することが実は格好のいいものなんだということを実感させるのです。

point 2 自分たちでやりとげるから、感動になります。

一つひとつの行事は生徒達にどんな感動や力を与え、つけさせるのか。人と人との協力共同のしかた、困難を乗り越えながら共に目標を目指す喜び、一人ではできないことをみんなで達成させる感動を体感していきます。その行事を担うのは生徒会です。

学園祭

「楽しい学校にするか、つまらない学校にするかは生徒一人ひとりが握っている」「僕は人生で一番大切なことは仲間との輪だと思う。いくらお金があり、物があっても仲間がいなければ心がさみしいのでは・・・・　学園祭はみんなのものです。そういうものを感じ取りましょう」これは生徒会長のことばです。学園祭は生徒会執行部のリーダーシップのもとにクラスやクラブやグループが若者のエネルギーを発散し、がっちりと力を合わせて、新しいものを創りだそうと頑張る場です。

ユニークな模擬店が並ぶクラス企画、クラス対抗合唱コンクール、バンド演奏、カラオケ大会、太鼓演奏、100人を越す父母のコーラス「北雀」、特別教室では絵画や写真の作品展、教会やボランティア施設の作品展と販売、PTA食堂の「おふくろの味」、全国名産品バザー、そして中庭でのライブや催しものなど盛り沢山です。

1年研修会

1年生は、5月中旬、積丹半島の突端余別で1泊の研修会を行います。本校の3年間をどう過ごすか。クラスや学年がどう仲良くやっていくか。ハイキングをしたり集団ゲームを楽しみながら「北星」を考えます。指導は先輩の生徒会執行部の人たちです。

強歩遠足

6月上旬の土曜日、本校の名物行事の強歩遠足が行われます。全校生、教師、約150名の父母が大自然の中をそれぞれの力に合わせて歩きます。最低は30キロ、元気な人は50キロ、70キロを歩きます。

途中関門でPTAの父母たちが冷たいお茶や飴をサービスしてくれます。ゴールにたどりつくと、お母さんたちが作ってくれたおいしいウドンが待っています。

この行事は生徒会行事で、クラスの旗を作ったり、全員完歩を達成するための話し合いをしながら準備を進めていきます。

楽しくて卒業生やその父母たちが卒業後も参加しています。

スポーツ大会

夏と冬の2回、クラス対抗のスポーツ大会を行います。バスケット、バレーボール、サッカー、バドミントン、大縄跳びなどで若い血潮が沸きに沸きます。クラスの応援合戦もにぎやかなものです。

修学旅行

2年生の10月。4泊5日で沖縄へ。「平和」学習の一環として、事前に沖縄戦の歴史を学び、現地の戦跡を訪ねて平和の大切さを学びます。

沖縄ならではのマリンスポーツを楽しんだり、どこまでも続く青い空と海に心をいやしたりと、南国の自然を満喫します。

生徒による実行委員会は修学旅行成功のため、力を発揮します。

年間行事予定

4
- ガイダンス
- 入学式、対面式

5
- 中間テスト
- 1年生研修会
- 生徒総会
- PTA総会

6
- 強歩遠足

7
- 期末テスト
- 夏季スポーツ大会
- 弁論大会

8
- 夏休み

9
- 学園祭

10
- 修学旅行（2年）
- 中間テスト

11
- 生徒会立会演説会

12
- クリスマス礼拝
- 期末テスト
- 冬季スポーツ大会

1
- スキー授業
- 海外語学研修
- 冬休み

2
- スキー遠足
- 予餞会
- 卒業テスト

3
- 終業式
- 学年末テスト
- 卒業式

北星余市の
活動

競いたい人は競い、競いたくない人は楽しむ

point 1 好きなこと、つきつめる

本校のクラブ活動のあり方は、「競いたい人は競い、競いたくない人は楽しむ」です。

学校として強い選手を特別に集めたりはしていません。それぞれが放課後を自分たち流の楽しみ方や取り組み方で過ごしています。

しかし、頑張って試合に勝ちたいと思えば、心を一つにして頑張り良い成績をあげています。ヨット部は全道レベルの力を持っていて、インターハイや国体の北海道代表にもなっています。また、美術部や写真部、放送局、書道部などは毎年全道大会に出場しています。

運動部	文化部
野球部	放送局
硬式テニス部	新聞局
バスケット部	美術部
サッカー部	書道部
卓球部	写真部
バトミントン部	アートピアクラブ
柔道部	軽音楽部
剣道部	平和ゼミナール
バレーボール部	演劇部
横乗り部	ピアノ部
ヨット部	

point 2 ボランティア

ボランティア活動が盛んです。老人ホームを訪問したり、施設での行事に参加したり、国際ソロプチミストから高く評価され、“S”クラブとして承認されています。

近年は、生活改善運動の勢いと共に、町内や浜、公園での清掃活動にも意欲的です。

point 3 30数年継続してきた校内弁論大会

本校弁論は今や全道、全国レベルとなっています。ことに中退や不登校という苦しみを本校において乗り越えた時、彼らの弁論はそれを聞く仲間に大きな感動と勇気を与えます。

そのことによって彼ら自身もさらに勇気を与えられることになります。

2005年度　校内弁論大会

［自由の部　最優秀賞受賞］

『My flower』

吉田　佳代子(3年)

花と聞いてみなさんは何を思い浮かべますか？私には花に対するかけがえのない思いがあります。その思いがこの体に刻み込まれているのです。

始まりは１歳の時。カップラーメンの熱湯で大火傷を負ったことでした。あの時の火のついたような痛みは消えることなく焼きついています。入院した私は、痛くて痛くて泣いていることしかできず、食べ物ものどを通らないため痩せ細っていきました。特に肩がひどくて、骨まで見えていたそうです。家族はそんな私を見て、私以上のつらい思いをしていたようです。　手術で治るんじゃないかと両親が必死にあちこちの病院で相談に行きましたが、余計に傷が増えてしまうということで断念したのです。こうして私は一生消えることのない火傷を負ったのです。そして心の傷をも負っていくことになったのです。

元気になった私は、幼稚園、小学校と進み、はじめてのプールの時間を経験します。

水着を着た時に現れた火傷を見て、みんなが同じことを言い出しました。「気持ち悪い!!」「触ったらうつる!!」そう言って逃げていきました。私にとってそれは残酷でした。心をズカズカ蹴られる思いでした。それだけで全ての自信をなくし、毎日いじめられようになりました。16歳を過ぎたあたりになると、よく火傷のことを、イレズミを消したアザと勘違いされ、そのつど嫌な思いをしていました。

こんな風にして私はトラウマを重ねてきました。

（・・・中略・・・）

人生での出会い。旅での出会い。出会いが人の心を大きく変えます。その出会いの中の一つが私を根底から変えてしまったんです。

その彼は、この島でもモーターバイクに乗っていた時、道路に犬が飛びだしてきて、犬をかばって転倒しました。足を骨折し、別の島の病院へ入院し、やっぱりこの島が好きだからと、松葉杖をついて帰ってきていたのです。

その時私は肩を出して歩いていました。

彼はすれ違いざまに私を見て、とても驚いた様子で、あっあっあっとなり、戻ってきて、飲んでいた水をいきなり私の肩の傷に向かってビューと吐き出しました。とっぴょうしもない行動でびっくりしましたが、彼は天使のようなまなざしでこう言ったんです。

「Whaw（ウァオ）It´s flower」

彼には私の火傷が花に見えたんです。

たったこの一言で、私は信じられないほどに感激しました。うれしくてうれしくてしかたなかったんです。

「ああこういう表現のしかたあるんだぁ！」たった一言とその彼の行動のように、幸せの魔法をかけることができるなんて。

人生はもっともっと夢のように（素敵なストーリーを作って）楽しく生きることができる!!!

その傷がどう見えるかという答えに、人の心が映し出されるんです。

私の傷が、花に見える。

その感受性を”希望”という言葉に言い換えてはどうでしょうか？

私はその希望の光となってたくさんの人を照らして行きたい。

［課題の部　最優秀賞受賞］

『未 来』

山口　真依(2年)

私の未来はまさに今だ。今を思いっきり楽しむこと、今を思いっきり悲しむこと。今を一生懸命生きていくことが私の未来を創る第一歩だと思っている。でも、少し前までは私は自分の未来が不安だった。

中学時代、私はテニス部だった。そこで信頼できるコーチに出逢い、テニスが好きになり、大会でも勝ちあがれるようになっていた。テニスに夢中だった。そして中３の夏。あと少しで部活を引退する。私は進路で迷っていた。県の中でもテニスの強い高校に行きたい。でも本当にやっていけるか不安だった。コーチが「真依ならできる。大丈夫だ。頑張れ。」って応援してくれた。その言葉で私は「頑張ろう！」、そう思えた。私の希望を先生達に話した。けれど先生達は「無理だ」の一点張りだった。中には最後までちゃんと聞いてくれない人もいた。確かにその高校は私の頭のレベルと内申では少し難しかった。でも私の希望は、落ちてもいい、それでも受けてみたかった。しかし、「駄目だ。」「お前には無理だ。」の連発で、希望は少しずつ薄れていき、悔しさと悲しさが残った。「じゃあ真依はどうすればいいの？」こんなことぐらいでおおげさだと思われるかもしれない。別にテニスができなくなるわけじゃない。でもその時はテニスをやってついてきた自信もなくなって、頑張りたい、貫きたいと思う気持ちすらなくなってしまった。

それからだと思う。未来に希望を持てなくなったのは。私は人と仲良くなるのが下手くそだった。だからテニスを離れコーチとも連絡をとらなくなってから私を信じて背中を押してくれる人はいなかった。「一人でも大丈夫」って言い聞かせて強がっていたけど、本当は寂しくてしょうがなかった。「なんでこんなに上手くやれへんのやろ・・・」

人は一人では生きていけない。その言葉通り、一人になった私は今にも腐って消えてしまいそうだった。そうだった、と言うよりも、「消えてしまえばいい」そう思っていた。全てに関して無関心なふりをしていた。でも本当は誰かに救って欲しかった。寂しくてどうしようもないことに気付いて欲しかった。私の３っつ上の姉は中学からの心友がいる。互いに思いやり、支えあっている。心友どころか友達のいない私には理解できない関係だった。そんな二人を見ているうちに、いつしか「友達」という存在に憧れを抱き、羨ましく思うようになった。その時、やっと私は一番欲しかったものに気付くことができた。「友達を創りたい！」でも、どうやったら友達になれるんだろう。

「もっと沢山の人と関わっていきたい。もっと見たことないものを沢山見てみたい。そしたら自分も成長して、これから出会う人たちのいろいろな表情が今までより沢山見えてくるかもしれない。まず、そこからやってみよう。」これが私の考えた結果だった。そしてそのきっかけとする場所に私はここ、北星余市を選んだ。家族もいない、知り合いもいない。こんなに離れた場所で私はやっていけるだろうか。確かに不安だった。でも、やってみるしかない。２年になった今でもそれは変わらない。だって「未来」というのは「今」を大切に生きることの積み重ねでできているんだと思うから。それは私だけではなく、誰にも言えることだ。この弁論を書くにあたって嫌というほど「未来」とは何かを考えた。考えても考えても、答えは見つからなかった。今を生きること、今を頑張ること。私はそれがきっと「未来」を創っていくんだと思っている。

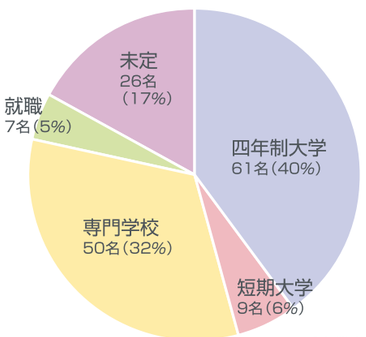
北星余市の
進路指導

こころ豊かに成長する3年間にしたい

point 1 推薦制度を活用して8割が進学

ここ数年の本校卒業生の進路状況は、進学（大学、短大、専門学校）が約80%、就職その他が約20%となっています。進学者は、主に指定校推薦や一般推薦制度を利用して進学しています。近年は、北海道教育大学をはじめ、小樽商科大学、山形大学、埼玉大学などの国立大学へも進学しています。これは、本校での学校生活をとおして、素直な自分を取り戻し、自信を持ち、小論文や面接などに強みを発揮できる人間に成長しているからです。

したがって、日常の学習やいろいろなクラス、生徒会活動やクラブなどの教科外活動が真摯で積極的なことが大事だと思います。その結果として希望に即した進路が決定されていきます。



［卒業生153名］

主な進学先（過去4年間の実績）

（道内大学、短期大学）

北海道教育大学（札幌）・北海道教育大学（函館）・小樽商科大学・北星学園大学・酪農学園大学・北海学園大学・札幌学院大学・道都大学・札幌国際大学・北海道情報大学・北海道東海大学・旭川大学・稚内北星学園大学・札幌大学・函館大学・北海道工業大学・札幌医療福祉大学・北海道文教大学・北海道浅井学園大学・北星学園大学短期大学部・小樽短期大学・北海道浅井学園大学短期大学部・北海道自動車短期大学・拓殖短期大学・札幌国際大学短期大学部・北海道文教短期大学・光塩学園女子短期大学・國学院短期大学・専修大学北海道短期大学・函館短期大学・札幌大学女子短期大学部

（道外大学、短期大学）

埼玉大学・山形大学・明治学院大学・和光大学・同志社大学・東京農業大学・東北学院大学・東北工業大学・東海大学・新潟経営大学・聖学院大学・青森大学・金城大学・名古屋学院大学・中京大学・中部大学・東亜大学・大阪芸術大学・駿河台大学・江戸川大学・仏教大学・日本文化大学・亜細亜大学・関西国際大学・天理大学・名古屋産業大学・人間環境大学・同朋大学・第一工業大学・中部学院大学・敬愛学園大学・見延山大学・城西大学・城西国際大学・敬和学園大学・明星大学・東洋大学・日本文理大学・駒沢大学・文教大学・神戸女子大学・大阪経済法科大学・大正大学・拓殖大学・東京国際大学・日本獣医畜産大学・長崎総合科学大学・別府大学・富士大学・徳島文理大学・西南学院大学・常磐大学・立正大学・恵泉女学園大学・東京福祉大学・嘉悦大学・桜美林大学・仙台大学・沖縄大学・中京女子大学・大手前大学・大阪樟蔭大学・淑徳大学・京都創成大学・京都産業大学・第一経済大学・石巻専修大学・青森中央学院大学・大阪学院大学・京都精華大学・神戸海星女子学院大学・神戸松蔭女子学院大学・追手門学院大学・追手門大学・山口短期大学・嘉悦女子短期大学・関東学院女子短期大学・梅花女子短期大学・大阪体育大学短期大学部・聖和学園短期大学・千葉敬愛短期大学・新潟工業短期大学・横浜美術短期大学・文化女子短期大学・関西女子短期大学・大阪産業短期大学・浦和短期大学・名古屋経済短期大学・中日本自動車短期大学・川村短期大学・長崎外国語短期大学・國学院栃木女子短期大学

point 2 「指定校推薦入学制度」

「指定校推薦」は、北星学園大学、その他数十の大学の特別推薦枠を利用します。本校が推薦すれば確実に入学できる制度で、日々の積み重ねを大切に学習を進めていきます。

また「一般推薦」やキリスト教学校教育同盟校推薦は、小論文や面接を突破して進学していきます。こちらは、本校の個性重視の学校生活で得た「自分らしさ」をアピールする生徒も多いようです。

- 他私立大学
- 北星学園余市高等学校
  - 北星学園大学・短期大学部
    - ●経済学部
    - ●文学部
    - ●社会福祉学部
    - ●短期大学部
  - キリスト教学校教育同盟校
    - ●酪農学園大学
    - ●東北学院大学
    - ●明治学院大学
    - ●同志社大学
    - ⋮

「奨学金制度があります」

本校の教育に魅力を感じ進学を希望しても、経済的な面で二の足を踏む家庭も少なくありません。

自宅外から本校へ通学するのであれば、学費や寮・生活費に最低でも月に10万円程度はかかります。

本校生が利用できる奨学金制度をおおいに活用していただきたいと思います。

	種　類	支給額		対　象
1	入学資金貸付	200,000円	7月貸与	生活保護又は非課税世帯　1年生
2	北海道高等学校奨学金（道内生）	月額 10,000～35,000円	貸　与	全学年
3	在住都府県奨学金（道外生）	月額等は所轄都府県により異なるので、出願等は保護者が行う。	貸　与	全学年
4	授業料軽減制度	月額（一種）14,000円 （二種）10,000円	給　付	全学年
5	北星余市校同窓会奨学金	年額 60,000円	給　付	2・3年生各1名
6	有馬・安孫子・手島・時任奨学金	年額 100,000円	給　付	1年以上在学男子
7	スミス・エバンス・モンク奨学金	年額 100,000円	給　付	全学年女子

＊その他交通遺児育英会等の奨学金があります。

ホームページ紹介

［学校案内］で伝わりきらなかったこと、今、現在の様子を知りたいという方は、本校のホームページを一度ご覧いただきたいと思います。

学校行事の報告など、かなりの頻度で更新されていますので、リアルな本校の雰囲気をつかむことができると思います。また、リンクから、卒業生・PTAの方々のHPをたどれば、違った角度から本校を検証することもできます。

URL➡http://www.hokusei-y-h.ed.jp
i-mode➡http://www.hokusei-y-h.ed.jp/i/top.htm

北星余市を支える人々

親が、教師が、地域が支える、北星余市はビッグファミリー

point 1 北星余市の寮・下宿

余市町民による民間寮・下宿は、教職員・生徒・父母・地域が一体となって創ってきた本校教育の歩みの大事な柱です。寮・下宿生活で過ごす先輩、後輩、仲間との時間はかけがえのない経験です。また、親元を離れてみて、親のありがたさを知るなど、生徒を大きく成長させてくれています。

現在、生徒の90%が学校指定の民間寮・下宿から学校へ通っています。寮・下宿生は、2〜3人のところから、30人を収容できる大きなものまでさまざまで、個室や2人部屋など本人の希望で自由に選べます。

寮・下宿の管理人は余市のお父さんお母さんとして、寮・下宿生を家庭的な雰囲気のなか温かく見守ってくれています。ほとんどが10年近いベテランで、共同生活や学校生活の悩みなど、学校と連携をとりながら、親身に相談にのってくれています。

この学校では先生や下宿のおじちゃん、おばちゃんがカウンセラーなのです。子供にとっても、親にとっても。（父母の声）

point 2 全国にネットワーク PTA・同窓会・OB会

「子どもが変われば、親も変わる。」本校の中で、生徒がぐんぐん変わってくると、親も我が子を応援するために、どんどんPTA活動に参加してきます。「私だけが苦しんできたんじゃない」ことに気づき、元気になります。学校に来るたびに「得をした気分」になり、行事のたびに足しげく、余市に集まってきます。先生に会うことも楽しみですが、父母同士の交流も楽しみになります。「分かり合う仲間」に親もなっているからでしょう。

子どもたちが卒業してもOB会を組織して親交を深めたり、教育相談会では、悩んでいる親子の相談にのり、北星余市をがっちり支えてくれる応援団になっています。同じように「北星」を支えてくれている同窓生も5000名を超えました。

いつのまにか「出れば得するPTA、出ないと損するPTA」、「集まれば元気になれ、話せば勇気が湧いてくるPTA」などの標語が自然にできてしまいました。

北星祭でもちつき

親たちのコーラス「北雀」

point 3 地元も応援 北星余市協力会

全国から若者が集まり、親たちも集う。北星余市の教育の評価も地元・余市に定着してきました。日頃の生徒たちの活動や学校に対して、さまざまな形で支援してくれています。そして、本校の存在が、この余市町に経済効果をもたらし、町おこしの一つになっていると言われています。　これからも本校の教育を地域の人々にオープンにし、真実を訴えながら共に教育を誠実に追求することをめざしていきます。

謹慎の館

本校では、いじめや暴力などの他、種々起こる問題行動に厳しく対処します。自宅謹慎指導もありますが、一定の条件の下で学校がお願いしている「謹慎の館」（生徒たちは「ヤカタ」と呼んでいます）にあずかっていただき、「館」のご家族と農作業や起居を共にするシステムがあります。

都会育ちの生徒がカルチャーショックを受けたり、実体験を通して働くことの大変さや社会を垣間見る窓になっています。「館」のご家族との生活は貴重な経験になります。土や草に直接触れ、牛や犬・猫などとのふれあいからも、落ち着きを取り戻し自分を見つめ直すきっかけになるようです。その後の学校生活で「自分を大切にする」変化が見られ、見違えるほど明るく元気になる生徒が多いようです。

思い出ノート（あったべや）

人と自然、そして文化の町

余市町長　上野　盛

余市町は、札幌市からJRで1時間という位置にありながら、豊かな自然と、海の幸、山の幸に恵まれた、住みよい町です。

余市町は、ニシン漁やりんご栽培によって発展してきた町で、宇宙飛行士の毛利衛さんや、長野五輪スキージャンプ競技の金メダリスト、斉藤・舟木選手の出身地としても全国に知られています。

また、町内には図書館や国指定の史跡などがあり、文化的な環境の中で仲間とともに学びあうことができます。

どうかみなさん、私たちの町で、発見と感動に満ちた青春時代をお過ごしください。人と自然が、皆様をお待ちしています。

「藤田ファーム」

「エンジョイファーム・ゆめ」

山口　芳之「あったべや」（赤井川村）
藤田　資「藤田ファーム」（余市町）
新藤　修　（余市町）
渋谷　俊一（美国町）
湯澤　幸敏「エンジョイファーム・ゆめ」（赤井川村）

なぜ学ぶのか？
―― 自分らしい生活を送るためです。

自由とは――自分に嘘をつかないことです。

成長とは ――**自分の経験**を生かす技術を身に付けることです。

大人とは――
自分の行動や発言に責任を持つことです。

考えるとは ―自分の知っている事を**頭の中で組み立てる**ことです。

団結とは――
お互いの足りない部分を補い、目標に向かう手段です。

学校とは――
試行錯誤しながら自分を発見する場所です。だから自分で選べます。

規律とは――ルールです。ルールだから**変えることも可能**です。

仲間とは ――
共に考え、共に感じることのできる同士です。

自主性とは何か ――
自分の意志を実行にうつすことです。
（まずは自分でやってみるということです。）

矛盾とは――これを感じたら、**話し合いが必要**です。

わかるとは――確実に自分のものにすることです。

教えるとは――
相手が理解するまで、**あきらめずに伝えること**です。

卒業とは何か ――
あなた自身の**誇り**です。

ここで得られるものは何か――たぶん**自分**です。

評価とは ――

自分の可能性を信じられれば十分です。
（人間の価値とは違います）

主体性とは何か
―
自分を信じて
周りの人にはたらきかけることです。

働くとは ――
北星余市で見つけた**自分の力を試す**ことです。